

金木犀の香る街で

絵を仕事にするということ…神無月の午後、出窓のカーテン越しに揺れているハンカチの木の、大ぶりの影を眺めながら恵二は呟いた。いつの間にか陽も傾き、ほの暗くなった自室に散らかった絵具に視線を落としてみる。恵二にとって絵の道に進むことは当然のように思われた。小学校の頃から図画の時間だけは褒められていたし、そんなこと関係なくも、見たままの景色が訴えてくる情感を色と形に還元すること、それは恵二にとっては息をするほど自然なことだったのだ。中学、高校と美術一本でやってきて美大に進もうと思ったのも、むしろ同級の友人たちに「お前はやりたいことが決まっていって良いなあ」と言われるのが誇らしいくらいであった。

しかしこの春美大に進んで半年、遅れて出てきた五月病かもしれないが、恵二の頭の上にはこの先の人生を画家として生きていく不安が大きいのしかかっていた。そして先日そんな気持ちを、商社勤めをしつつ趣味でジャズバンド活動をしている叔父にぶつけてみたところ、思わぬものを見せられたのだ。「まあ、画家の道を志すのは、僕らの爺さんの血だろうからなあ。大丈夫、自信を持つことだ。」え！？曾お爺さん画家だったの！！？と目を丸くする恵二を前に、叔父は写真を取り出した。叔父の手には、古びたモノクロ写真が2枚。1枚は上下ツートンの古い電車をバックに笑顔で肩を組む2人の青年、右下には小さく「写真家金木と、中央電停の記念に」とある。もう1枚は一面のただっ広い水面の中、レールも見えるや見えぬやの中をどこへ行くとも知れずしずしと進んでいく2両編成の小さな電車。こちらの方が幾分画質が良いが、どこで撮ったとも記録されていない。



2枚の写真のコピーを取らせてもらって自宅に帰った恵二は父にそれを見せて聞いた。父は大した関心を見せなかったが、「ああ爺さん、お前の曾爺ちゃんな。若い頃の写真だろ。これがどこか？それは知らんがな。ただ爺さんは確かに名の知れた画家だったし、昔浦和に住んでいたらしい。電車も好きだったそうだが、お父さんは電車はよく分からんな。」その言葉だけを頼りに恵二はネットに向かった。ヒントは写真家金木、中央電停、浦和、と一面の水面を電車が行く景色だけだ。しか

し調べていくうちに、写真家金木というのは不明だが、浦和の地に金木写真館という古い写真店が残っているということが分かった。金木というのはもしかしたらその家族だろうか。中央電停というのは分からぬが、何か金木写真館と関係があるのだろうか？恵二は秋の休日、意を決して浦和の地に我がルーツを求めることにしたのだ。

中野で生まれ武蔵境で育った恵二にとって奥武線に乗ることは今まであまりなかった。早めの昼食を新宿駅地下のカフェで済ませて奥武線新宿駅正面の大改札を入ると、降車ホームも合わせて7面のホームがずらりと並ぶ。次の優等列車は、12時50分発の急行宇都宮行き。5分前に熊谷行きの急行が出たばかりということもあるが日曜日の昼下がりの下り電車は比較的空いていて、6両編成の電車には座席もちろほら空きが見られた。要町を過ぎて、蓮根の手前で台地上から低地の高架線に躍り出る。荒川を渡る車窓を見遣れば空高く流れていくススキ雲。どこまでも蒼い秋の空に、柔らかな陽が優しい。

南浦和で武蔵野線からの乗り換え客であろうか？どっと客が増える。荒川を渡ってから住宅と工場や郊外店

が混じる低地をずっと走ってきた電車は南浦和を出て急に高度を上げ台地上の邸宅街に沿って走るようになるが、間もなく車窓の先に高層ビルやマンションが林立する景色が見えてくると、地下に入り一気に車窓が消え、車内がパッと明るくなった。

浦和の地下駅には13時5分の到着。13時5分、そして駅はひっくり返って5面13線。そんなどうでも良いことを考えてふふふ…とほくそ笑みながら、恵二は正面の改札を出た。中ノ島地下通路の案内が「右:JR 浦和駅、左:県庁、正面奥:伊勢丹」とあまりにもアバウトだ。とりあえず地上に出て、家で調べてきた金木写真館を探す。駅前から伸びる大通りを歩くと街中の景色はまさにスクラップアンドビルドの真っ最中。古い商店が壊されて空き地になっているところや、はたまたここは青山か原宿かという前面に植物を這わせた真新しいおしゃれなビルや天を衝く綺麗なタワマンも立つ中、一方では大正か昭和からあるのだろうかというこじんまりした簞店が周囲に埋もれるようにオレンジ色の電球を灯していたりする。県庁へ向かう道からかつての中山道に入ると、臙脂色に舗装された小綺麗な歩道に沿って、やはり両側に商店やレストラン、銀行、またこの数年で建ったのだろうタワマンなどが雑多に並ぶ。この現在進行形で破壊と新生が進む街のどこに曾祖父のルーツが残っているのだろうかと刹那不安がよぎるが、中山道から脇道に入り正面に古刹の山門が見えてくると、流れる空気が変わった。

カーブを描いて山門をぐるりと囲むように設けられたタイル敷きの道。かつて渋沢栄一の肖像写真も手掛けたという金木写真館はその静かな脇道に、切妻の外連味のない破風を見せていた。大正モダンを感じるバルコニーの下に据えられた、重い木戸を開けると、天井から仄かな陽の光が差し込む檜の階段を下る足音。白髪の女主人がすっと姿を現した。「あなたが、高原の曾孫さんなのね。初めまして…。」

金木写真館の主人には予め電話をして自己紹介していたので話は早かった。写真館の主人が曾祖父を知っていたのは驚きだった。旧制美校、現在の東京芸大出の曾祖父は在学中の昭和8年から空襲に備えて郷里の東北へ疎開するまでの10年間、この地で制作を続けたという。写真館の若旦那であった金木というのは女主人の父親に当たる人で、曾祖父とは馬があったのかよく省線駅前の「ときは団子」で芸術談義を繰り広げていたとか。「私は難しいことは分からんと思っていたけれどね、よく雨が降ると、父に傘を届けに駅前に向かったのよ。すると父はいつも煙たそうな顔をするんだけど、高原さんは必ず団子を一つ買って来てね、私は丸メガネの奥に見る高原さんの微笑みが大好きだったものよ。いつしか傘を持っていきたくて今日も雨が降らんかなあと、父が高原さんとときは団子に向かうたびに、雨が降るのを楽しみにしていたっけ…あ！こんなことはどうでも良かったわね。」齢八十を超えた女主人のまなこに、幼き日の淡い恋の灯がともるのを、恵二は見て取った。自分の苗字は町屋。祖父の代に養子に入り祖母の姓を引き継いだため、高原という曾祖父の名には正直親近感を感じない。しかし金木写真館の女主人の話聞くうちに、当時浦和に集っていた画家達の中でも曾祖父の高原は一目置かれる若手作家であったことが、恐らくは高原に思いを寄せていた幼き日の金木少女の、数倍は美化された記憶とともに、ひしひしと伝わってきた。「私は昭和5年の生まれだから、当時は10くらいだったかしら。今思うと、当時新進気鋭の画家としてもはやされていた高原さんも、まだようやく30歳になる頃だったのね、今思えば若かったのね、お互い…」目を細める女主人の思い出話は留まるところを知らない。



「あの…」洋画の界隈で頭角を現していたという曾祖父の来歴を初めて聞かされた驚きに圧倒されつつも、恵

二は言葉を継いだ。「この写真なのですが…」1枚は中央電停で撮られたという青年高原と金木さんの写真、もう1枚はどことも知れぬ水原を進む2両の電車の写真。「ああこれ…」一層目を細めると、女主人はびっくりすることを語りだした。「昔はうちのすぐ裏が奥武線の駅でねえ…」え！？恵二は仰け反った。「昔は浦和中央電停と言って、うちのすぐ裏に奥武線、いえ、その前身の中山道電鉄線の駅があったそうなのよ。私も4つになる頃のことと臆げにしか憶えていないのだけれど、中山道電鉄線と東北から来たあれ、何でしたっけ、奥羽越線がくつつくことになって、駅も省線と同じ場所に移ったのよね。それからもう一枚の写真、これは多分、台風の日染谷辺りじゃないかしら。いつだったか、父が鉄道好きな高原さんに連れられて電車の写真を撮るんだと言って出かけて行ってね…」どうやら、「中央電停」での二人の写真は、鉄道マニアでもあった曾祖父が、まもなく廃止される浦和中央電停の記念に金木さんと撮ったものらしい。もう一枚の水原に行く写真は、大宮の東、見沼たんぼの中を行く奥武本線の線路が台風で冠水した時に、「すごい画が撮れるぞ！」と言って曾祖父が金木さんを無理矢理連れ出して撮らせたものなのだから。写っている電車はモハ150形といって、当時の奥武線の主力車両、真鍮色に輝く車両は埼玉県内では茶色一色の省線よりも目立つ存在で、人気だったそうだ。見沼に行く線路はやはり大雨が降るたびに冠水するというので、戦後しばらくたって高架化されたという。今では直線状に伸びる高架線路を、朝夕ラッシュ時には12両編成の列車が行く一。

写真館を出ると、恵二は駅とは反対、今でも古い商家や額装店、ギャラリーなどが軒を並べる裏門通りを歩き、県庁の脇を抜けて西へと歩くことにした。金木写真館の女主人がひととき懐かしそうに語っていたのだ。「私、一度だけ高原さんと二人でデートをしてもらったことがあってね、今でも忘れぬ昭和18年の秋、当時昭和園といって小さな遊園地になっていた、別所沼にね。二人で行ったのよ。空が高くてね、遠くかかるススキ雲が揺れていた。坂の下に広がる沼のほとりで、私、誓ったのよ。高原さんはもう結婚されていたけれど、きっと、自分も大きくなったら、こんな素敵な人を見つけるんだって。戦争が激しくなって、間もなく高原さんは東北に帰って行かれた。あの日の別所沼デートは私への餞別のつもりだったのね。」県議会や県警の並ぶ官庁街を抜けて別所の邸宅街に入ると、そこは昭和の頃、画家たちが集まって活躍していたアトリエ村だったという。道行けば金木犀の香りがそここから漂う。この街の家々には金木犀が好まれているのだろうか。正面奥には邸宅街の先に立ちのぼるように、メタセコイアの巨木が黒々と群れている。こんなところに森が？と思わせるその木立こそ、女主人の言っていた別所沼公園。戦局に一喜一憂し、その中でも恋があり、生活があった昭和18年、曾祖父が自身に懐いていた親友の娘を連れて歩いたその日にも、ここには金木犀の香りが漂い、遠く抜けるような蒼い空には同じススキ雲が流れていたのだろうか。曾祖父はあるいはこの街での日々を空を見上げて反芻しつつ、病がちであった身も案じ、戦火を避けて関東を去る決意をここでしたのだろうか。恵二は、東京に戻ったらあの写真館を描こうかな、そう思い出していた。

